

「村」からの弾劾

——徳富蘆花「灰燼」と西郷隆盛——

平 石 岳

はじめに

明治三二年二月一日、高村光雲が手掛け、東京・上野恩賜公園に落成した西郷隆盛銅像は大きな反響を呼んだ^①。しかし、この兵児帯姿で犬を連れた像に対する当時の反応は、決して肯定的なものだけではなかった。

高山樗牛は、西郷を「不世出の豪傑」といいながらも「大帝国の首府の而かも第一等の公園地」である上野公園に、「叛逆」者の銅像が建てられたことに疑義を呈し、それと同時に「理想的大人物の影象としては、南州の記念像の如何に小さく、見すほらしきよ」と、その姿形に不満を漏らしている（「西郷南州の銅像を評す」『太陽』第五卷第二号 明治三二年一月）。蒼海白鷗も、西郷像の姿形が設計者の「大失策」であり、「日本の首都の首なる公園内に建ておく

にハ、最も憚るべき身装」だと批判した（「記念銅像」『読売新聞』明治三二年一月二七日）。画報子「西郷隆盛の銅像」（『風俗画報』第一八二号 明治三二年二月）も「之を觀望するに、一見遊獵発明者の記念物かと怪まるゝこそいと口惜しけれ」と姿形を揶揄した。さらに正岡子規も「ある人の所謂野蠻の像が東京の中央に建てられるは不体裁の限りなり。之を鹿兒島城山に移すべしといふ説其當を得たり」（『銅像雜感』『日本』明治三三年一月二日）と述べている。

このように、市井の西郷像批判の中に多く見出せるのはその「身装」に対するものであり、「不世出の豪傑」でありながら「叛逆」者であるという西郷の二面性は「首都の首なる公園」に建てられた「野蠻の像」というねじれた形で人々の前に現れた。徳富蘆花「灰燼」（『国民新聞』明治三三年三月三日～三日）は、そのような西

郷の二面性が再び人々に突き付けられ、話題となっていた時代に執筆^②発表された。

勝本清一郎が「蘆花が傾倒した軍人たちの群像の頂点は西郷隆盛なのであった^③」と述べたように、蘆花にとって西郷は特別な人物だった。明治四四年二月一日に行った講演「謀叛論」で「今日となつて見れば、逆賊でないこと西郷のごとき者があるか^④」と一高生たちを激し、「死の蔭に」（大江書房 大正六年三月一日）でまとめられた九州旅行では、西南戦争の戦跡を辿り西郷の墓を訪ねている。

『新春』（福永書店 大正七年四月一日）では、「日本人中で」「一番私の好きな」人物に、西郷を挙げていっているほどである（「春信」三三）。しかし本稿で取り上げる「灰燼」では、西南戦争で西郷に従った一青年が、故郷の「村」で家族から切腹を強いられる悲劇が語られる。たとえば吉田正信は、ここに蘆花の「厭戦思想」を読み取り「日清戦争によって生じた軍人遺族の悲嘆に共鳴するもの^⑤」としている。ただ稿者が注目したいのは、「灰燼」が明治一〇年代から数多く刊行された西南戦争戦記、読物、従軍記を踏まえてつくられつつも、ひとつの「村」の視点から、西郷や西南戦争を語っているところである。

「灰燼」は、後にベストセラーとなった『自然と人生』（民友社 明治三三年八月一日）に巻頭作として収録される。だが本稿では

多くの先行論のように、「自然と人生」という作品集のなかで「灰燼」を捉えることはせず、初出の『国民新聞』版を対象テキストとしながら、初出時のみの表現や改稿にも目を配る。そのような作業を通して、蘆花が「書きなおす作家」であったことを再確認しながら、蘆花がこの時期に西南戦争を背景としつつ、ひとつの「村」での物語をつくった意図とその方法を検討してみたい。

一、「可愛が嶽」からの脱路

西南戦争中からジャーナリズムによって喧伝された西郷軍の戦闘は、たとえば生住昌大がまとめているように、先行する数々の軍記物語に重ね合わせられた錦絵や記事などによって、「客観報道」からかけ離れたやり方でその勇姿が想像されていった^⑥。西南戦争終結間近には「西郷星」という風聞が生まれ、明治一〇年代から、西郷の生涯を、あるいは西南戦争を主題とした絵本や読物が数多く出版されていく。西南戦争を題材にした物語は明治の〈新戦記〉として、人気を博していったのだ^⑦。その人気の理由は、後に軍歌として有名になる外山正一「抜刀隊」（『新体詩抄』丸善書店 明治一五年八月）の詞章に、端的にあらわれている。

我ハ官軍我敵ハ 天地容れざる朝敵ぞ／敵の大将たる者ハ 古
今無双の英雄で／之に従ふ兵ハ 共に慄悍決死の士／鬼神に耽

ぬ勇あるも 天の許さぬ叛逆を

新政府軍の立場から「敵の大將」をうたうこの新体詩は、西郷をあくまで「朝敵」「叛逆」者としながらも「古今無双の英雄」と呼び、その配下の「勇」をも讃えている。「英雄」でありながら「賊」として死んでいったその西郷の悲劇性に人々は惹かれていったのだ。

そして明治二〇年代になると、帝国憲法発布（明治三二年）の大赦によって西郷に正三位が追贈され、明治二四年には西郷生存説が世間を騒がせたこととも連動して、西南戦争や西郷その人の生涯を問い直そうとする動きがさらに活発になる。民間から読物的な（新戦記）が引き続き刊行されていくのに加え、川崎紫山『西南戦史』全一二編（博文館 明治二六年八月一〇日～二月一六日）、勝田孫弥『西郷隆盛伝』全五卷（西郷隆盛伝発行所 明治二七年八月二三日～二八年三月一九日）という大部の著作が刊行された。ただ新政府側も、西郷が「賊」だとする〈事実〉を伝えるため、参謀本部編『明治十年征討軍団記事』（陸軍文庫 明治一三年九月）、参謀本部陸軍部編纂課編『征西戦記稿』全六五卷・付録（陸軍文庫 明治二〇年五月二〇日）などを刊行している。『征西戦記稿』は「賊徒ヲ征討シタル戦記」（凡例）であることが宣言されており、巷に溢れる「賊」を中心化した読物とは異なり、実際に戦闘に参加した新政府兵たちの「報告」や「日記」に基づいたものであることが強

調されている。

このような、西南戦争あるいは西郷の物語を様々に（読む）状況があったことを概観したうえで、まず「灰燼」の物語が次のように開幕することに目を向けたい。

我此翁と故山の土とならばやと、残る一隊三百余人、草鞋の紐緊々と引しめ、明治一〇年八月十七日の夜をこめて月影聞き可愛が嶽の山路にかゝりぬ。（中略）土人を案内として桐野真先に立てば、薩摩緋の単衣に紺染の兵児帯一尺余りの小脇差を腰にばつこみ尻高、とからげて煙草吸ひく、中軍をうつ南洲、村田貴島別府河野野村山野田坂田増田の諸将前後を擁し、殿には逸見の一隊。仮令鉄壁にもあれ、我前に立たん程のものは蹴破つて行かむものと思ひ込むでは、坐ろに打咲まれつ。

（上 一一）

敗色濃厚ではあるが、「可愛が嶽」における「南洲」（西郷）と従う者たちの不敵な姿が示されている。続いて（上 一二）では、「南洲」の行軍から脱落し「阿母」^{おつか}を想いながら新政府軍から逃げる青年が登場する。吉田正信は（上）を「そつのない導入部」と片づけているが、この（上 一）は「灰燼」において重要な役割を果たしている。たとえば福井淳編『絵本明治太平記』（金田益次郎 明治一九年一〇月）において、「可愛嶽激戦の事」は次のような場面とな

っている。

桐野貴嶋ハ三百人に將として先陣たり中軍ハ西郷親ラ三百人に將とし後陣に逸見百五十人を率ゐ村田別府其外以下の諸將ハ今日を以て最期の一戦と決し断崖絶壁無徑の地を陟り可愛嶽の絶頂に達し第一第二の旅団本営に不意に突き入りたり

「可愛が嶽」の戦闘とは、包围された西郷軍数百が新政府軍数千に突撃し、三田井への退路を切り開いた戦闘であり、多くの戦記類で大きく紙幅が割かれている。また、たとえば勝田孫弥『西郷隆盛伝』第五卷（西郷隆盛伝発行所 明治二八年三月一九日）には、

「可愛が嶽」の戦闘の直前に次のような場面がある。

隆盛諸將士に云つて曰く今や我党の武運既に尽きたり余刃に伏して以て將士の命を救ふ可し諸士も亦妄りに多くの人命を傷ふこと勿れと又士卒に告げて曰く諸士当に官軍に降るべし官軍亦敢て諸君を害せざるべしと

このような、西郷が自軍に号令し投降を勧め、決死隊の選抜を行う場面（解散令）が多くの戦記類で設けられている。つまり「可愛が嶽」の戦闘は、生き延びるための選択肢を放棄し、決死の集団となった西郷たちの奮闘が活写される〈見せ場〉であつたのだ。このことを踏まえると、〈上 一〉で戦いを前にして「煙草吸ひく／＼中軍をうつ南洲」と、「我前に立たん程のものは蹴破つて行かむ」と笑

う志士たちを読んだ読者たちが想起するのは、読物的な戦記類にあらわれる勇猛な西郷たちの姿であつただらう。しかし〈上 二〉に登場する青年は、そのような〈見せ場〉に参加できずに新政府軍から逃げ延びていく。

蘆花自身が後年記したように、「灰燼」は蘆花が姉常子から聞いた「Y家（弥富家）の話がもととなつている。しかし「中瘋の父も、弱い母の発狂も、愚かな長兄も、剛気の仲兄も、縊れて死ぬる主人公の恋人も、乃至すべてを「灰燼」にしてしまふ其家の火事も、すべて空想の産物であつた」と記しているように、従軍した一青年が故郷の家で切腹させられた、という話の骨子のみを蘆花は「灰燼」に活用した。その「村」の設定も、弥富家があつた熊本「沼山津村」から大分中津の「城下から二里ばかり離れた山村」にしている。蘆花は「新年の新聞に「灰燼」は出た。第一回は南州の可愛嶽突出である」と、〈上 一〉で「可愛が嶽」を描くことを意識していた。つまり「可愛が嶽」で、生還の望みを捨て突撃しようとする西郷たちと、行軍から脱落し故郷の「阿母」^{おかえん}を想う青年を描いたこの〈上〉は、蘆花が舞台を変更してまでも設けたかつた場面なのである。それでは〈中〉以降で、このように語られた西郷たちと青年は、中津という「村」のなかでどのように語られていくのだろうか。

二、「疫病神」か「福神様」か

〈中 一〉では、「西郷さんから、此処等の小供までが軍の真似
ばかり、戦争程いやなものはないね」と語るお菊の母が登場し、
茂の身を案じるお菊に対して次のように語りかける。

「何でも甚兵衛が話ぢや、城山の落ちたのが先月の廿四日で、
西郷さんも死ぬる、中津の増田さんも死ぬる、其れからまあ此
中津近在から出た者は今まで一人も帰つた者はないから、茂さ
んも死んだか、降参して牢家に入つたか、彼様な勝気な人ぢや
から一番に討死しなかつたらうつての、其で上田の家ぢや最早
茂さんを亡者に定めて——」

「城山」の戦いも終わり、「可愛が嶽」の戦闘から二ヵ月後の、西南
戦争終結直後に作中時間は移行している。ここでお菊の母は、死ん
でいった「西郷さん」や「中津の増田さん」に従つた茂を、「勝気」
という茂の気質から「一番に討死」したのだと想像する。そして
〈中 二〉では場面が変わり、村人二人の会話が次のように示され
る。

「戦争と云や、西郷さんもえら荒れ廻つたが、地に入つちや最
早仕方がねへものだね」／＼「左様さね、彼疫病神の御蔭ぢや如何
程皆困つたか知れねへ、此中津近在でも泣の涙で居る家が四五

「村」からの弾劾

十軒はあるね、さし寄りがそれ御屋敷の——」／＼「茂旦那も最早愈
駄目かね」／＼「まあ其様なものか」／＼「フウむ、茂さんが駄目とな
つちや、大旦那や奥様はこら非常御力落しだね。ぢやが、甚兵
衛さん——」／＼「エ？」／＼「猛旦那にや西郷様は福神様さね」／＼「違ね
へ」

〈上 一〉によつて予感させられた勇猛な西郷たちの姿は、「村」に
おいて語られることはない。むしろここでは「此中津近在」にとつ
ては「疫病神」だったと、西南戦争によつて多くの命が失われた
「泣の涙」が溢れる「村」の実感のなかで西郷が語られている。決
死の集団となつた西郷たちのその後や、「城山」での最期のような
説物的記述ではなく、また国家にとつての「賊」や「英雄」といっ
た巨視的な視点でもなく、あくまで中津というひとつの「村」の
人々の感情によつて西郷は語られているのだ。

さらに「猛旦那にや」「福神様」と、以降に登場してくる上田家
次男・猛にとつては、その西郷が「福神様」だったとさえ語られる。
ここで示されている、上田家それぞれの人物と、「村」における西
郷への認識、立場の違いは、「灰燼」の物語の展開を検討するうえ
で最も重要な視座を与えてくれる。〈中 二〉では続いて、茂の帰
村の様子が語られているが、上田家長男・覚は「誰かと思ふと茂の
馬鹿ぢや」「可愛が嶽で伴侶に離れて、腹切らふと思つたけれど、

其も出来ず」と語り、茂を嘲笑する。ここで、お菊の母が想像した「勝気」なために討死をしたであろうという茂の像も覆されることになるのだ。

この茂という青年は、〈中 三〉で語られるように「学問のすゝめ」「自由の理」「東京の新聞」を読み漁り、「自由の権利の民権の」と言ひ罵り、征韓論民撰議院論非大久保政府論など未だ乳臭き口にお菊の母も口にしていた増田宗（宋）太郎とは、中津出身の実在の志士であり、西郷とともに没したと推測される人物である。親戚であった福沢諭吉が『福翁自伝』（時事新報社 明治三二年六月一五日）で「賊軍に投じて城山で死に就いた一種の人物で、世間にも名を知られています」と述べているように、多くの戦記類に登場する。川崎紫山『西南戦史』第三編（博文館 明治二六年八月一日）には「増田宋太郎小伝」が附録されているほどである。しかしここで確認しておきたいのは、先に述べた舞台設定とも関わる、増田率いる中津隊の所業である。藤谷虎三『絵本近世太平記』「中津の暴徒大分県庁を襲ひ尋て薩軍に投ず」（岡本仙助 明治二二年六月二四日）では、増田は「義兵たるを信じ」て拳兵したものの「中津市中の豪家を劫かして恣ま、に金銭を掠奪し」、「火を沖浜船頭町等の民家に放ち勢に乗じて監獄を破り悉く罪人を放ちて之を率ゐ」

て西郷軍に合流した。このような所業ゆえにお菊の母や村人二人の会話では、西郷も増田も中津の「泣の涙」を引き起こした張本人であるという、恨みがましい思いが語られるのである。

このような思いが渦巻く「村」に逃げ帰ってきた茂に対して、上田家の家長代理となった猛は厳しい姿勢で対峙していく。〈中 四〉で茂は、西郷の認識と自身の処遇をめぐって猛と争う。猛は西郷を「逆賊」「朝敵」と弾劾し、茂に自刃を迫る。これに茂は反論を試みるものの、「家名」を持ち出されると「頭を垂れ」るしかない。「母の顔継るが如くうちまも」った茂に救済の言葉はかけられず、「可愛が嶽で死ぬのだった！」と絶唱し切腹する。それは「家名を汚して、討死もせず、阿容阿容帰つて、親兄弟に迷惑をかけて」という猛の言葉に抵抗できず、屈していることを茂自身が吐露していると見える。西郷の「英雄」という可能性に賭けて自らの正当性を主張することはなく、茂は母にすることができなかつたのだ。ここで注目したいのは、茂が「可愛が嶽」突撃前の解散令に応じ、生き延びるための選択をしたのでなく、また西郷に殉じようと決死隊となる覚悟を決めたわけではなく、行軍の途中で「落ちたまま気絶」し、新政府軍に見つかり「驀地に逃げて」（上 二）故郷の「村」に帰ったという設定がなされていることだろう。茂の気質は、上田家三兄弟のなかで「熱する」「火」（中 三）と語られていたこと

も考えると、西郷に対する情熱を唱えながら、その自らの言葉に従いきれず、また恥を忍んで生き延びたのでもなく、ただ故郷の

「村」に帰り「寝てゐる」一青年の姿が「灰燼」では語られている。

多くの先行論で指摘されている、(家)による犠牲という観点からは説明しきれない、茂の強い意志の不在がこの物語の要なのである。

しかし、西郷の「賊」という面を強調し、そのうえで「家名」を持ち出して茂を裁くことに成功した猛の主張は、「家産」を独占し、お菊を我がものにしたという本音を隠してもいた。(中 三)で語られるように、お菊から恋情を向けられていた茂は憎しみを抱いており、それが茂を裁く要因でもあった。建前として上田家の「家名」を持ち出したこの猛の主張の歪みは、茂の自刃後、かえって猛に、そして上田家に向かつてくることになる。

三、上田家の弾劾

(中 四)で茂を弾劾する直前、猛は「世間の思はく」を援用しながら、次のように父母を説得していた。

吾子が可愛いから、賊になつて討死もせずに阿容阿容帰つて来ても、役人や巡査に賄賂して隠匿つて置いた、なんて屹度言ひますぞ。こゝで一つ思切つて、茂が潔く覚悟をきめたら、流石上田家は違つたもの、武士は違つたもの、賊には出て見事に

「村」からの弾劾

最期を遂げた、茂さんも感心ぢやが第一親御がよく思ひ切つた、如何しても武士は違ふ、と斯様言ふのは、見る様です。

猛は「世間」から「武士」として認識されている上田家の問題として、茂を裁かなければならないと説いていた。猛はこの論理で上田家を統御したのだが、しかし茂の自刃後の「村」では、次のような「囁」が取り交わされることとなる。

何処の里にも絶へぬ不家が、「金満家は幸福な者、謀叛に担つて帰つて来ても、巡査も一向知らん貌で過す」と唸やきし言葉は、やがて「金満家は嫌な者、子が帰つても庇ふ道は知らず、腹切らせて自分ばかり安閑として居る、金満家の子になるより乞食の子が猶優ちや」と云ふ囁にかはりて、抑え難き村の悪感（下 一）は霧の如く「御屋敷」の周囲を立籠めたり。

茂の帰村によつて噴出した「村」の感情は、自刃後も解消されることはなく、かえつて「金満家の子になるより乞食の子が猶優ちや」という「囁」に転じる。つまり猛が「世間」を援用した主張は「村」で共有されることはなく、かえつて上田家への「悪感」の要因となつてしまうのである。

「年々の蔵人も千俵に下らず、地券證文古金銀の類は幾棹の長手に溢れ」(中 三)る上田家とは、「村」にとつて「金満家」であるがゆえに平伏すべき家であつた。しかし、猛が父母に、そして茂

に対して持ち出すのは「武士」の家の論理であり、この主張が通用してしまう上田家は、「村」の人々に「子が帰つても庇ふ道は知らず」と、非道な家として「囁」かれてしまう。つまり、「村」における「金満家」という上田家の認識と、猛が唱え、茂を裁くことに成功した「武士」の上田家という主張は、食い違っていたのである。このような上田家をめぐる認識の違いは、西郷をめぐる認識の違いとバラレルな関係にある。「村」の言葉は、(上 一)で予感させられた勇猛な西郷たちの姿を語ることなく、また猛が持ち出してきた「武士」の家の論理にも与することはない。むしろ、上田家を弾劾していくのだ。

ここで、「金満家」の上田家という「村」における認識について、『自然と人生』版には見られない、初出時のみの表現を確認しておきたい。初出の(中 二)には「明後日愈家督相続の披露をして、地券證文の書換をすれば、名実共に吾有になるのだ、彼屋敷も土蔵も、此田島も山林も、皆吾有になるんだ」という猛の独白があり、(下 二)(『自然と人生』版では(下 三))には、「計らずも其日父が中風を發して、余命長からじと見たるより、息ある内に処理し置く可き書類證文の類をも収め、一には母兄を迎へむと使者をも遣らず」という猛の行動が語られている。さらに(中 二)における村人二人の会話でも、初出には「生命がありやこそ楽もある、金が

ありやこそ頭も下がる」「兎角世の中は長命して金でも溜めて人に頭を下げ指すだね」との文言がある。このように初出で強く示されていたのは、「武士」の家の論理を持ち出してくる猛自身が「家産」に執着する欲深な人物であり、かつ「村」で上田家は「金満家」としてしかとらえられていないことだった。

このような初出と『自然と人生』版の異同は、大小含めて八十数カ所確認できたが、そのすべての部分において、蘆花の改稿の明確な意図を見出すことは困難である。ただこのような部分から、作家が最初に作品を執筆した際に意識していたことを点検し、そこに手を加えていたことを確認することは、その創作態度を検討するうえで重要なことだと考える。たとえば(下 一)の後半でも、上田家の母が失火を行う場面で、初出では「列々と燃へ上りぬ。」の次に「手を拍つて笑ふ母は障子を指さして、／＼茂、茂、御覧な、珊瑚の障子、珊瑚の障子！」との文言があつたが、『自然と人生』版では削除されている。これ以外にも、母の失火の場面にはいくつかの異同がある。このような部分からは、茂を目の前で自刃させてしまった母が、茂の幻に錯乱し、狂気に陥っていく場面を試行錯誤しながらつくりあげていった蘆花の姿が浮かんでくる。

そしてここからは、その失火による上田家の火災をめぐって、「村」からどのような言葉が湧き上がるのか、に注目したい。(下

二で「上田の御屋敷」が燃え上がる様子を見た村人たちは、「素晴らしい火勢ぢやねへか、最早御屋敷も駄目ぢやの」と「口々に云ひ罵り、消火活動を行うことはない。それどころか「旦那、一人で消しなさろ！」と猛に反抗するそぶりすら見える。「金満家」として幅を利かせていた上田家は、「家産」が消滅すると「村」での地位を失墜させるのである。猛自身も、母をおぶって助け出した覚に「道具は如何した？ 大切な物は皆出たか？」と詰め寄り、家族ではなく「家産」を気にする。ここで、「世間」や「家名」を口実に茂を裁いた猛の主張が建前であり、「家産」を独占したかったという本音が露呈する。

さらに上田家が「灰燼」になった後、猛は「村の指目の後影護き」によって「村」を去ることを余儀なくされ、「其後の消息は伝はら」ない。「世間」を援用し茂を裁いた猛は、今度は自らが「世間」によって追放されてしまうのである。そして、「灰燼」の物語は次のように終幕する。

園部の家にては、あらためてお菊を茂が墓に合葬せしが、村の者は之れを「比翼塚」と呼びて、少女子が手向くる四季の野花は墓前に絶えず。上田の屋敷跡は何故にか人忌みて、家を建つ者もなければ、八重葎姿に生い茂りて、昼も虫の音滋く、燃へさしの老楠の棟のみ今も其ま、に残れりと、去年耶馬溪に遊び

「村」からの弾効

て此の村を過ぎりし或人の語りき。(下 三)

茂の帰村後、お菊の動向や互いの恋情は作中でほとんど語られることはなかった。しかし、自死したお菊と茂はあたかも心中を遂げたかのように「比翼塚」として埋葬される。つまり「村」は、西郷に従ったために強制された茂の自刃をも、恋愛的美談に仕立てあげてしまうのである。¹⁸⁾

茂は、猛からの弾効に対して、信じて従った西郷と自身を庇うための言葉を獲得し、発することができなかった。そして猛は、本音を隠しながら「武士」の家の論理で上田家を統御し、茂を裁くことに成功したが、狡猾に用いたはずの「世間」がかえって自身を追いつめていく。西南戦争で大きな被害を受けた「村」の人々は、西郷に従った茂に反感の情を抱くが、茂が自刃すると「金満家」の上田家に「悪感」を向け、上田家が「灰燼」となったことを機に猛を追放し、茂の自刃を恋愛的美談として語る。このように「灰燼」で展開されていたのは、匿名的でたやすく反転する「村」の言葉こそが結果的に力を持つていく過程なのである。

西郷隆盛が、国家にとつて「英雄」なのか「賊」なのかという、同時代で再び取り沙汰されていた論点は、「村」で共有されていない。「灰燼」では、猛個人の欲望のもとに西郷が利用され、あるいは西南戦争で被害を受けた中津の「村」の実感によって西郷が語

られていくのだ。銅像落成というひとつの社会的顕彰が東京にて結実した時期に、「灰燼」は、ひとつの「村」の、ひとつの家を舞台にし、西南戦争戦記類を想起させつつ、そこには決して描かれることのないような無名の人々の悲劇を描いてみせた。「灰燼」の登場人物にとって西郷は、命を賭して従う対象になることなく、あるいは邪魔な弟を排除するための方便でしかなく、あるいは小さな共同体を不幸にさせた張本人でしかない。このような西郷をめぐる人々の物語は、当時の『国民新聞』が、国家にとっての「英雄」を、しきりに語っていた文脈に照らしても異質なものであったといえよう。

『国民新聞』では、西郷像落成を報じた「東京だより」欄（明治三十一年二月一八日）で、「英雄崇拜心は、国民の元氣なり、民性を雄且つ大ならしむる所以也」と述べ、西郷像の服装を「絶好の趣向」と肯定した。そしてその理由を「維新の大元勳たる功業」よりむしろ「彼の献身的精神」が「国民に信せられ、崇められ、愛せられたる」ためだとしていた。さらに西郷像落成から約一ヶ月後には、蘇峰との交流もあつた勝海舟の死が大きな話題となる。『国民新聞』明治三十三年一月二四日の紙面は大きく黒枠で囲まれ、蘇峰の執筆と見られる「海舟先生」以下、追悼記事が連日掲載される。「海舟先生」では、維新の実態を看破したのは「老西郷」と「海舟翁」であるとして、勝と西郷がセットにされて語られている。同日の山路生

（愛山）「海舟先生を論ず（一）」も、「当時若し先生と南洲となからしめば何ぞ都下百万の生霊と云はん我大日本の国運も亦未だ測る可らざるものありし也」と述べた。

そして二五日の「東京だより」欄では、先に挙げた西郷像落成記事と類似した「英雄崇拜心」をめぐるレトリックが、勝の死に対しても用いられることになる。ここでは、勝を「英雄」と名指した上で「英雄崇拜心は国民の元氣」であり、「別語を以て云へば英雄崇拜心は、国民の向上、渴仰の精神」だと述べる。二六日の「死せる英雄活ける国民」では、「死せる英雄は、時としては活ける英雄よりも、大いなる感化を及ぼすことあり」とし、続けて、「英雄の前に立ちて、其の英雄的精神に打たれざる国民は、是れ自暴自棄の国民と謂はざるを得ず」と述べた。このように「英雄崇拜心」を連呼し「死せる英雄」を利用して、『国民新聞』は国民教化を打ち出していた。

奇しくも『国民新聞』明治三十三年三月四日、「灰燼」第二回（上二）が掲載された同一紙面には、蘇峰生「平凡なる生活」が掲載されている。ここでは「平凡の生活、必らずしも英雄的心事なきにあらず。平常の生涯、必らずしも献身的精神なきにあらず」と述べ、鬼籍となった維新の志士の中でも西郷を「英雄」の筆頭に挙げ、「己」と「利益」を顧みずに国家に「献身」することの必要性が説

かれています。このように、西郷の「賊」という〈事実〉は国家への「献身」と言い換えられ、それゆえに西郷は維新の「英雄」なのだと言られていたのである。

しかし「灰燼」では、一時は西郷を信じて従ったものの、故郷の「村」に逃げ帰った一青年や、私欲のために西郷の「賊」という面を利用して弟を裁いた兄の姿などが描かれた。「灰燼」は、西郷を語ることの背後に、何らかの思惑や欲望が潜んでいることをあばきたてる物語としても、『国民新聞』紙上にあらわれていたのである。

おわりに

「灰燼」における「村」の言葉は、「可愛が嶽」の場面が描かれたことで読者に想起させられた西郷らの勇姿や、『国民新聞』が当時連呼していた「死せる英雄」としての西郷を語るわけではなかった。むしろ、西南戦争によって多くの人々の命が失われた地方、中津の「村」における生活感情によって西郷を語っていた。このような局所的な視点で、西郷とそれに従った青年、そしてその家族の物語を「村」との関係性から描くことに、蘆花の意図はあったと思われる。後年蘆花は、『国民新聞』紙上で数日にわたって「灰燼」を読んだ蘇峰の様子を次のように回顧している。「兄も機嫌がよかつた。然し追々と回が進んで、剛突張りで弟の許嫁に横恋慕する人物が出

「村」からの弾劾

て来ると、兄の顔色は悪くなつた^①。この蘆花の言を、単に〈兄弟〉の不和のしるしとして片づけてしまつてはならないだろう。(上)で語られた西郷たちの不敵な姿に期待したものの、後の展開に興ざめしていく『国民新聞』主筆の反応を観察する蘆花には、西郷を持ち出して国民教化をしようとする『国民新聞』の姿勢を、その内部にいながら問おうとする企図が少なからずあつたはずだ。

注

- ① 西郷像の建設場所と服装をめぐって、薩摩閥、長州閥、華族、宮内省が水面下で衝突したことについては、樺山愛輔『父、樺山資紀』(大空社 昭和六三年六月二〇日)、木下直之『銅像時代』(岩波書店 平成二六年三月二七日)、恵美千鶴子『高村光雲・後藤貞行ほか西郷隆盛像』(『国華』第一四二六号 平成二六年八月)などを参照。
- ② 蘇峰宛書簡・明治三二年二月二日付(蘆花全集刊行会編『蘆花全集』第二〇巻 新潮社 昭和五年六月五日)と『富士』第二巻第十六章(二)(福永書店 大正一五年二月一日)での記述から、「灰燼」の執筆時期は明治三二年一月末から二月末だと推測できる。
- ③ 勝本清一郎「蘆花と士族的倫理」(『明治大正文学研究』第三輯 昭和三二年一〇月)
- ④ 引用は『謀叛論他六編・日記』(岩波文庫 昭和五一年七月一六日)による。
- ⑤ 吉田正信「灰燼」論——蘆花の叛旗」(『日本文学』第二四巻第三号 昭和五〇年三月)

- ⑥ 生住昌大「西南戦争と錦絵——報道言説の展開と明治一〇年代の出版界」(『日本近代文学』第九〇集、平成二六年五月)
- ⑦ これらの絵本、読物については、松本常彦「明治実録の二例」(須田千里・松本常彦校注『明治実録集』新日本古典文学大系明治編13、岩波書店、平成一九年三月二八日)などを参照。
- ⑧ 西南戦争中から明治三〇年代までに世間を騒がせた(西郷伝説)については、尾崎秀樹『現代視点戦国・幕末の群像 西郷隆盛』(旺文社昭和五八年七月二五日)、小林実「空想と現実の接点——大津事件に先立つ西郷隆盛生存伝説」(『日本近代文学』第七四集、平成一七年一〇月)などを参照。
- ⑨ 注5前掲論
- ⑩ 『富士』第二卷第十六章(二)(注2前掲書)。荒木精之「熊本の文学遺跡」(熊本市観光課、昭和四二年三月二日)にて詳しく調査がなされている。
- ⑪ 『富士』第二卷第十七章(二)(注2前掲書)
- ⑫ 西郷側の従軍記として刊行され、蘆花の蔵書(蘆花恒春園内蘆花記念館)にも確認できる『戦袍日記』(南江堂、明治二四年五月一三日)の著者・佐々友房は、解散令前後に重傷を負ったため戦線離脱しており、その無念を長々と書き残している。「薩軍大半降ル独リ西郷翁、桐野、村田諸氏以下降ラザル者四五百人ナリト云フ嗚呼此是レ何ノ日ゾ実ニ明治十七年八月十七日ナリ」など、同書を蘆花が参考にした可能性は高い。
- ⑬ なお末尾の「去年耶馬溪に遊びて此の村を過ぎりし或人の語りき」は、初出時のみに見られる表現である。
- ⑭ 『富士』第二卷第十七章(二)(注2前掲書)

〔付記〕 作品や資料の引用に際して、旧字は新字に改め、振り仮名は適宜

省略した。引用文中の傍線は稿者により、/は改行を表す。また本稿は、日本近代文学会関西支部・二〇一五年度春季大会(六月六日、於武庫川女子大学)での口頭発表に一部基づいている。会場内外でご意見を賜った方々に御礼申し上げます。